

星野妙子編『ラテンアメリカの企業と産業発展』
(研究双書 No.468) アジア経済研究所 1996年
xii + 222ページ

本書は、ラテンアメリカの産業発展を研究するうえで、政府や多国籍企業と比較してその役割が十分に評価されてきたとはいえない、民族系民間企業の特質を明らかにしようという試みである。

第1章(小池洋一)は、ブラジルにおいて経済自由化が進む中で、企業はどのような対応を迫られているかという現代的なテーマを扱っている。第2章(星野妙子)は、メキシコの鉄鋼業において成功した企業と失敗した企業の二つを比較して、成否を分けた要因を輸入代替工業化期に両者が辿った過程に求めている。第3章(宇佐見耕一)は、世界恐慌前後のアルゼンチンで、経済政策の重心が一次産品輸出から輸入代替工業化に移行するなかで工業保護政策が形成された過程を、当時の産業資本家の主張の検討を通じて検証している。第4章(新木秀和)は、多国籍企業が支配的な中南米のバナナ産業においてエクアドルでは民族系企業が成長した要因を分析している。第5章(岡本哲史)は、19世紀にチリの銅産業を興隆させた3人の企業家の革新性を論じている。

(浜口伸明)

加茂雄三著『地中海からカリブ海へ』(これからの世界史6) 平凡社 1996年 271ページ

本書は、日本語の文献が少ない中米・カリブ諸国について、スペインによる征服と植民地化の過程から冷戦後の現代までを、歴史的に俯瞰した入門書で

ある。これまで出版されたこの地域に関する日本語文献は、「危機」といわれた1980年代、あるいは米国との複雑な関係を扱ったものが多く、これらの地域を理解するために不可欠な、植民地時代からの歴史的背景にはあまり言及されてこなかった。

とくにカリブ地域についてはこれまで、中米諸国と一緒にして論じられ、往々にして中米に大半のページが割かれてしまうきらいがあった。その意味では本書はとくにカリブ諸国に重点をおき、その歴史を総合的に理解するには格好の入門書といえる。

第1, 2章では、植民地時代について、いかにヨーロッパがカリブ地域を征服する必要があったかが、とくに砂糖産業を軸として世界的視野でまとめられ、中米に関しては、無秩序な侵略と政策が多く矛盾をもたらした様子を概観している。

第3章では、米国の干渉と覇権主義の下でのこの地域の変容を主要国別(キューバ、プエルトリコ、パナマ、ニカラグア、ドミニカ共和国、ハイチ)に述べ、第4, 5章では第二次世界大戦後から冷戦終結後まで、独裁体制の崩壊と、社会主義および社会民主主義政策の試みと挫折、内戦と民主化の問題、米国の政策の変化などを取り上げている。

(山岡加奈子)

近藤敦子著『グアテマラ現代史: 苦悩するマヤの国』彩流社 1996年 259ページ

長い内戦と人権侵害で苦しんできたグアテマラという国の歴史は、日本ではあまり知られることがなかった。それは、この国の抱える問題が、あとがき

で筆者自身が述べているとおり、ニカラグアやエルサルバドルの内戦のように東西の冷戦構造の枠組みでとらえられる性格のもでなかったからであろう。

本書は、日本で初めて書かれたグアテマラ現代史であり、1930年代のウビコ政権から和平交渉が締結された96年までを対象としている。一般にあまり知られていない、グアテマラの政治史を歴代大統領のエピソードなどを交えて読みやすくまとめており、グアテマラの歴代政権がどのような政策をとってきたのかを概観することができる。

しかし政治の流れを細かく追おうとするあまり、先住民族とラディーノ、軍・政府の関係性を視座に据えたグアテマラ社会全体の変容についての歴史的考察が表面的なものにとどまっている印象を受ける。また、1996年の和平交渉合意はグアテマラにとって歴史の分岐点ともいうべき大きな出来事であったが、それを促してきた先住民族の社会運動の動きがあまり伝えられておらず、残念である。

これを機に様々な視点から第2、第3のグアテマラ現代史が日本で出版されることを期待したい。

(村井友子)

V・ベンホルト＝トムゼン編 加藤耀子(他)訳
「女の町フチタン：メキシコの母系制社会」藤原書店 1996年 366ページ

世界で類をみない母系制社会が形成されているフチタンは、メキシコ南部オアハカ州にある小さな町である。そこに住むサポテコ人の女性たちは、メキシコというマクスモの国の中でありながら、経済的にも社会的にも独立し、自らを主人とする生活をの

びのびと営んでいる。

本書の著者のひとり、ヴェロニカ・ベンホルト＝トムゼンは、ドイツの社会学者であり、1990年から1年間、他の研究者とともに同地域に住み、調査にあたった。本書はその研究成果をもとに書かれたものである。

フチタンの女性達がいかに生計をたて、どのような日常生活を営んでいるのか、フチタン社会の中で商品はどのように流通しているのか、女中心の社会にあって男と女、さら第三、第四の性の関係はどのような意味を持つのか、等々が、固有名詞の人々の生活ぶりを通していきいきと語られ、明らかにされてゆく。

フチタンの女性の多くは商人として、トルティージャや郷土料理など、生活に必要なものを販売し、交換しあって生計を営んでいる。そして何より重要なことは、彼女らにとって、食糧の調達から、料理、掃除、洗濯、育児など、生活に必要なあらゆる労働が価値あるものだということだ。なぜなら利益追求の近代社会においては、これらのサブシステム生産は軽視され、多くの女性達が搾取される立場に置かれることを余儀なくされているからである。現代社会におけるジェンダーの問題を考える上で、示唆に富んだ一冊である。

(村井友子)